

あなたが知らない
脳の「**真実**」
② 脳役割分担を理解する

脳科学的には英語が苦手です。当たり前

英語が不得手な日本人。国内では「口達者なデキる奴」と目される人も、国際舞台に放り出されると、途端に口が重くなる。大金をはたいて英会話学校に1年間通ったのに……。自分を責める人は少なくない。

東京大学准教授の酒井邦嘉氏は、同大学院で博士課程を修了後、研究員として米ハーバード大学など世界的な研究機関に身を置いてきた。当然、英語で議論をすることが多いわけだが、かなり手を焼いたという。それもそのはず。「日本人が英語ができないのは、脳科学の見地からすれば当たり前なんです」。言語と脳の関係について研究する酒井さんはそう言い切る。日本人の英語下手の背景には、科学的な理由があったのだ。

脳において言語機能を司るのはブローカ野とウェルニッケ野。酒井さんはさらに踏み込み、「文法」「文章理解」「単語」「音韻」を処理する場所を突き止めた(下図)。また最近の研究では、言語に関するこれら4つの基本要素を処理する部位が、母語と第二言語でも同じであることが分かっていた。

日本人の英語下手と、このことがどう関係するのか。つまりはこうだ。日本語を母語とする環境で育つと、脳は日本語に特化した神経回路を作り上げる。12歳頃にその回路は完成に近づく。社会人として世界に飛び出していく頃には、日本語専用のOS(基本ソフト)を搭載した脳で、英語を処理するような状態になって

いる。「F1レース用の車でラリーに参戦するようなもの」。とりわけ鬼門として立ちは大かたるのが「文法」や「音韻」だ。

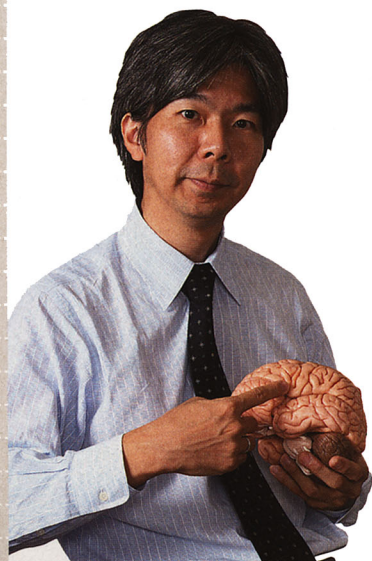
日本語に最適化された脳は、異なる英語の発音を正確に吸収できない。どうしても、日本語風に耳に入れて処理してしまう。英単語をたくさん覚えても、「何をしゃべっているのか分からない」「うまく聞き取れない」といった問題に直面する理由は、突き詰めると脳に帰結する。

英語をマスターするためには、英語用の神経回路を新たに構築する必要がある。「既存の脳を新しいOSで上書きするくらい」の気持ちで、とにかく時間をかけてチューンアップしていくしかない。

日本人の脳は日本語に最適化されている



左図は「言語地図」と呼ばれ、言語に関する4つの基本要素を処理する部位を示している。「文法」「文章理解」「単語」「音韻」の場所を突き止めた



酒井邦嘉氏 Kuniyoshi Sakai

東京大学准教授
1964年生まれ。92年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。米ハーバード大学医学部リサーチフェローや米マサチューセッツ工科大学(MIT)言語・哲学科訪問研究員を経て現職。著書に「言語の脳科学」(中公新書)など多数。